

旅する丹後君 
シリーズ

シファカの横っ飛
びダンス 

丹後 剛

マダガスカルの章

マダガスカルと言えば、私にはシーラカンスの印象が強い。1938年、付近の海でたまたま漁師が釣り上げた、厚みのある異形の魚。その生きた化石が生息するというその島はいったいどんなところなのだろう。少年の頃から、漠然と行ってみたいと思っていた所だ。その後、確か日本の博覧会やウィーン、ロンドンの自然史博物館でホルマリン付けのシーラカンスを見た記憶がある。テレビでは、海の底で、生きたシーラカンスの姿を捉えた番組を見た。この他のマダガスカル印象としては、CMで見たシファカの横っ飛びダンスが記憶に新しい。輪尾キツネザルも有名だし、アイアイやら原始的な霊長類の宝庫でもある。カメレオンも実に多くの種類が生息するようで、世界のカメレオンの半分から3分の2程がこの島の固有種と言われる。それに、逆さま木との別名もあるバオバブも象徴的だ。独特な生物相を有するこの島は、是が非でも行かなければならない、そんな声が次第に私を駆り立てるようになっていた。

マダガスカルについて、調べた。

面積、58万7000km²。これはフランスとベネルクス3国を足した面積とほぼ等しい。或いは、ケニアともほぼ同じ広さだ。幅が約600km、長さが約1500km、海岸線が5000kmに及ぶ。アフリカ大陸の対岸には、モザンビーク共和国があり、両国を約400kmのモザンビーク海峡が分かつ。この400kmが、マダガスカルの生物相に決定的な影響を与えた。

巨大な米粒といった形状のこの第7の大陸では、人々は本当にお米を食べている。驚いたことに、住民の顔は、アジアのそれだ。マダガスカルの住民の起源はインドネシア人といわれる。1000年位は、顔型が維持されるようだ。丸顔のあのにんまりとした顔、昔の友達にそっくりだ。大統領（執筆時点）は、Ratsiraka Didier、フランス風の名前だが韓国系らしい。マラガジー（一般には「マダガスカルの」という形容詞。人や言葉も指す）は、インドネシア語に似ていると言われ、人種的にも、文化的にもアジアというイメージで見た方が近いのかもしれない。これにアフリカ大陸の人種、文化が混ざっている。

人口は、1995年に1320万人。人口増加率3%。若者が多い。人口ピラミッドは典型的な途上国型で60%が20歳以下だ。驚いたのは、幼児死亡率。日本だと1000人に4人位だが、ここでは、120人もいる。ということは、8-9人に一人が死んでしまうということだ。平均寿命は男性52歳、女性55歳。これはエクアドルやペルーでも感じたが、若者の非常に多い街には何か不思議なパワーを感じる。一人当たりのGNPは世界で下から6番目（93年）。91年の債務1500億ドルほどの返済比率は32%で、目安となる15%をかなり上回っており苦しい。

オランダ、イギリス、フランスによって進出が争われ、1896年にフランスがマダガスカルの領有を宣言した。フランスの植民地からは1960年に独立。以後、社会主義の道を歩むも、1992年の国民投票により、従来社会主義を捨て、議会制民主主義をとっている。大統領の任期は5年。98年2月に選挙があったはずだ。議会（下院？）には138の定数があり、4年毎に改選される。上院は、3分の2が間接的に選ばれ、3分の1は大統領が、経済界、社会活動団体？、文化界、宗教界から選ぶ。凄いものだ。農業が、GDPの4割、輸出の8割を占める。3つの国際空港があり、4000kmの舗装道路と、11000kmの舗装されていない道路が国土を走っている。

国旗が象徴するように、赤と緑がこの国の印象的な色彩となる。

20世紀末のある8月3日（月）

思い立ったが吉日、マダガスカルに行くことにした。

今、オフィスのルームメイトで、短期のバイト学生がいる。中国系のおじいさんを誇りに思っているこのフィリップ君とサッポロラーメン（というのがお店の名前。）で昼食を取った後、本屋でマダガスカルのガイドブックを購入した。ジュンクで見つけた日本語のものは、2頁位しか情報を載せておらず、費用効果を考えて購入しないことにした。これは、それだけの需要がなく、したがって日本人はあまり行かないところであるということの証左だろうか。

8月4日（火）

航空機やら彼の地でのガイドやら、とりあえずヴィザ以外の手続きが済んだ。空港だけだが、日本語のできるガイドが迎えてくれるそうだ。日本語が出来る？日本人観光客が実は多いのだろうか？後日、マダガスカルに行ったという同僚からは、日本人はたくさんいたということだった。何故、日本人だと分かったのかは、聞かなかった。まだ、日本人が多いのか少ないのか半信半疑だ。8月14日出発の予定だから、お世辞にも十分に余裕を持った準備とは言えない。本当に行けるだろうか。マダガスカル大使館は、シャトーのすぐそばにある。すぐビザの申請に来ることになるから知人を訪ねたついでに寄ってみた。受付のおぼさんはアジアの顔だ。ビザ関係の事務は午前中しか扱っていないこと、航空券を持参する必要があること、また写真は4枚！、費用は170FFといったことが明らかになった。いずれも重要な情報だ。申請用紙を2枚もらってきた。

8月6日（木）

マ大に行って、やっとVISAの申請書を受理してもらえた。実は、昨日も行ったが、書類不備で受け取ってもらえなかった。最初に行ったときに、教えておいてくれればいいのに。おぼさん！。しかし、Good News は、明日、VISAできるとのこと。

8月10日（月）

3日続けてマ大に行ったので、金曜日はさぼってしまい、今日ようやくVISAを取ってきた。後は健康に留意することだ。

8月13日（木）

出発前日。昨日までに仕事を終え、今日は暇なようにした。インターネットで情報を取ろうとしたが、あまりサイトの数も多くないし、今一つ情報がとれない。民族辞典などでも、マダガスカルはその知名度の割に情報が少ない。ふと立ち寄った店で、いいデイバックを見つけた。もっぱらカメラ用と決めた。

最後のあがきで、g o s p o r tで、スノーケルとビーチサンダルを買った。

8月14日（金）

出発。滞在するホテルの電話番号などを日本の実家にFAXして、家を出る。もっとも中には電話もないホテルもある。CDGからエアバスA340の200か300。何故かベルディーのトラバトールが耳にこだました。当初の席は40k（二列席の窓側）だったが、あたし主人と離れたくないの、というアジア系の奥さんのわがままを寛大にも聞き届け、席を交換してあげた。あの奥さんは、べつとりとフランス人の旦那さんに甘えており、かたはらいたし、の感否めず。一方、私の移った先は四人席で、3人の親子が座っていた。が、ここにもドラマがあった。両親とも完全な白人なのに、子供は完全なアジア人なのだ。きっと、もらいっ子したのだろう。この御両親にも、子供にも辛いことがあったらうし、これからもあるに違いない。ああ、それを家族三人でいたわりあいながら乗り越えていくのだ。美しい家族愛。血の繋がりはなくても、この家族を中心に生きていくのだ。喜びも、悲しみも皆、この家族で。子供が「パパ」とか「ママ」とか言う度にジーンとしてしまう。いいから、おまえは早く孫の顔を見せなさい、と両親に怒られそうだ。

しかし、こればかりは、... この家族を見ていて、こんな話を思い出した。

ある貧しい母子家庭。働き者の母が倒れ、入院する。肉親の同じ型の臓器を移植する必要がある。息子は、喜んでサインし、検査をする。と、型が違いすぎ、他人であることが分かってしまう。一般のドナーから同一の型のものを探すのは、不可能に近い。母の助かる見込みは極めて少ないと医者に言われる。血のつながらないこの息子は、悲しみにひしがれながら、今は行方知れずの父が、昔撮ってくれた写真を見る。苦しく思えた日々なのに、あの頃は、どんなに生きる甲斐を持って日々を過ごせたことか、涙が止まらない。と、ある写真に見知らぬ女の子が映っている。どうしても思い出せない。どこかの親戚の子かも知れない、息子は一縷の望みと共に意識のもうろうとした母に問う。「あの娘に近づいてはだめ。そっとしておいて。」とだけ母は答える。... 長くなりそうなので、ここでおしまい。

アンタナナリボに夜到着。入国ゲートは、ビザあり、ビザなし、住民、の3つに別れている。ビザ無しは、その場でお金を払ってビザをもらうのだが、何故か、彼らが最も早くすいすいとゲートを通過していく。ビザありは、時間が掛かる。が、住民、のゲートが一番時間がかかっており、理解に苦しむ。空港には日本語が上手なガイドが迎えに来てくれていた。日本大使の奥さんに教わったというとても丁寧な日本語で話す。彼の、外見とミスマッチなほどに品格のある日本語に、思わず私の日本語まで影響を受けてしまう。

彼問うて曰く「パリ、ニハ、ドノクライ、ゴタイザイ、デ、オラレルノデ、イラッシャイマスカ？」

私応えて曰く「ハイ、ワタクシハ、スデニ、ニネンカン、ホド、パリニ、オリマスノデス。アト、ハントシ、ホドデ、キコクヲ、サセテイタダク、コトニ、ナッテ、オリマスノデス。」

彼合点して曰く「アア、ソウデ、ゴザイマスカ」

私頷いて曰く「エエ、ソウナンデ、ゴザイマス」

日本人が聞いていたら、吹き出してしまいうだろうに。

8月15日 (土)

マダガスカル島の初朝(ハツアサ)。思ったより寒い。それはそうだ、今は冬なのだ。外は凄惨な排気ガス、と思ったら、震らしい。昼になり、気温が上がってくるとこのもやもや晴れた。何も持たない人がゆるゆると歩いているところや物をタライに載せて頭で運ぶところが、発展途上にある国らしい。8時の約束をキツカリ5分エレガントに遅れて、運転手のリックさんが来た。こんなところまでかつてのフランス植民地の影響が残っているのだろうか。彼は決してハンサムな顔の造りではなく、岩チャンのようだが、好感が持てる。まじめに苦勞してきたアジアの顔だ。英語が出来るのがなによりだ。時々全然通じないこともあるが、それはそれで楽しい。

今回の旅は、マダガスカル島の真ん中にある首都、アンタナナリボ(千人の兵士の意味)が出発点になる。ここから車で南西に下り、イサロ国立公園(マダガスカル島のグランド・キャニオンと言えばイメージが沸きやすいかも知れない)を経て、モザンビーク海峡に面する避暑地、Ifatyに出る(ここは、差詰めマダガスカル島のグレート・バリア・リーフだ)。そして、今度は空路で、マダガスカル島の反対側、南東のフォー・ドファンという街に出て、車で少し北西のベレンティーという私設の保護区に向かう。ここでキツネザルやらシファカらと今後の自然保護政策に関して意見交換を行った後、フォー・ドファンに戻り、空路、アンタナナリボに帰る。そして、フランス領リユニオン島経由でパリに戻る。無事に帰りますことやら。

今日は、少し南のアンチラベという街まで行く。プスプス、という人力車がたくさんある。裸足で曳いている者がほとんどで、ヒタヒタという裸足の回転がリズムカルで小気味よい。道ばたのお店では肉が鉤つりにされ、時に豚の足が、5~6本まとめてかかっている。頭上のタライで運ばれる鶏は小ぶりで、まだら模様の鳥が多い。カリサという台車は、荷重で車輪がハの字になっており、使いにくそうだ。

アンチラベのホテル内のレストランで昼食を取った。鴨の「vakinankaratra」というメニューが印象に残る。最初、バッキン・ナンカ・トラレタラと読んで、次ぎにバイキン・アンカラ・トラと読んで、正解は不明だが、とにかく凄まじい名前だと恐れ入った。結局、ゼビュ牛のステーキにした。固かったがうまかった。ビールは、1993年、ワールドセレクション金賞受賞のスリー・ホースイズ。650ml、5.4%をほとんど一気飲み。酔っぱらって、出来上がったしまった。

午後の「湖」見学のため、ロビーでリックさんを待っていると、見知らぬ白人が寄ってきて「さあ、行こうか」と言う。？彼は、私を自分のガイドと間違えたようだ。彼はぼつが悪そうに、くるっと回って、トイレに逃げ込んだ。その名もA l o t e lという、このアンチラベのホテルはいい。しかし、周辺には荒れ山、裸山が多く、こういうところには大した動物もいないだろうと思う。湖岸では、ほったて小屋のような店が数軒、琥珀やきれいなたまご石を売っている。後に、21世紀の人々に驚嘆をもって迎えられることとなる「マラガジー・アイボリー(マダガスカル島の象牙)」と言う、それはそれは巨大な昆虫入りの琥珀が、ここで、この時に丹後氏により購入された。むしろ自分では、何か白人商人と同じ様なことをしているようで心に引っかかるものさえある。小さいのもまとめて全部で500FF(一万円位)で買った。仮にこれを米の購買力で比べると、ここでは安いところで米が1kg30円位だから、一万円で米は330キロ買える。ということは、日本では、10万円位の価値があるかな？私自身は、これは数十万円以上の価値があると思っている。デンマークの琥珀博物館の相場で言えば、あれは、60~70万円近くするはずだ。今日が命日の知人が、この琥珀に引き合わせてくれたのかも知れない。琥珀に閉じこめられた虫には、甲虫、アリ、蠅、ゴキブリ？、蚊と様々だ。惜しいのは、いつ頃のものが、よくわからないことだ。でもいい、ざっと5000万年前のものと思ひこむことにした。

夕方。明日は予定を2、3キャンセルすることになるかもしれないが、ranomafana公園に行きたい、どうしても行きたい、とドライバーに言った。昨晚、俄にガイドブックでその存在をしり、2時間くらいの寄り道ですむと思ったので、突然のことで恐縮しながらも少し強お願いをした。ドライバーは言った。「途中、道が悪いし、予定を急に変更されるとレストランやお土産屋に後で謝らなくてはならない。公園まで行くとなると本来なら、社に連絡して追加料金ということになるのです。が、私は、あなたにマダガスカル滞在中に最高に満足してもらおうのが仕事です。ヨゴザンス、参りましょう。でも、少し早めに出発する必要がありますよ。」ああ、泣かせる、ありがとう。ありがとう。ということで...

8月16日（日）

朝4時半起床、5時チェックアウト。キャー強烈に眠いし、寒い。こんなに早く出発しなければならないとは思っていなかった。私は、ドライブ中寝ることもできていいのだけど、リックさんに申し訳ない。私も、できるだけ寝ないようにして、あなたの気持ちに合わせるようにするし、後で、チップも弾むからなんとか「私をranomafamaに連れてって」。そして、バンブー・レミューに会わせておくれ。

途中、キリが深く、ソロソロ運転で行く。このキリは、主に水田や水路の水が蒸気になって発生したものだ。いたるところでキリが発生し、時に晴れ渡り、時に吹雪の中のようにもあり、実に幻想的だ。何台か事故やら田圃に転落したのやらにお目にかかった。ここでは、車が村などを通るとき、クラクションを2、3度ならして、そこのけそこのけお車が通る、をやって人やニワトリ、七面鳥や豚を道路から追っ払いながら、走り抜ける。マダガスカルでは、さすがにもう車を見ることさえ珍しいというご時世ではないようだが、それでもプジョーの305などまだカッコいい車に入るのかも知れない。半分くらいの人が、ニヤニヤしながら車の動きを視線で追う。ただ、残りの半分くらいはやはり、うるさそうだ。そういえば、、、ケニアでは、ラシッドが抜群のドライビングテクニックを披露してくれた。が、こんな事もあった。故障したトラックを車の下に潜り込んで修理している人の横を凄い勢いで走り抜けた時のことだ。昨日からの雨で、道はドロドロ。ラシッドは、注意喚起のつもりでクラクションを2度鳴らして走り抜けようとした。と、修理をしていたおじさん、何事かと、車の下から出てきた。とたんにドンピシャリのタイミングで我々の車がはねた泥に襲われた。おじさんは、為す術もなく、黙ってベツチャアアーン。泥浴びをしてしまった。何事が起きたのかを理解するのに時間を消費し、その間に、我々はある程度離れてしまっていた。後ろを振り返りながら見ていると、やれやれ、と言う感じで特に怒るでもなく、目の辺りを二の腕でぬぐうと、また車の下に潜り込んで修理を始めた。心の大きい、いい人なのかも知れない。いけないことは、皆わかっている。わかっていたが、一人がこらえきれず笑い出すと、皆笑い始めた。本来ならば、止まってお詫びをしなければいけないところ、あなたのお心の広さに甘え、思わず笑ってしまいました。また、この泥道で一旦止まってしまうとスタックすることが目に見えていますので、このまま横滑りをしながら走り去ることを何卒、お許し下さい。

一方、リックさんは割と丁寧に村を走り抜ける方なのでその点は救いだ。ちなみに走行メーターは、21万キロを示している。それが理由かも知れない。そういえば、信号を見た記憶がない。この国には、信号がないのだろうか？

11時、公園に到着。電線の付け替え工事をやっている。側溝に通じる変なまあい工作物があるが、きっとこれは、小専用の青空トイレなのだと思う。だって、匂うのだ。アルフォンスという、名前だけはカッコいいおじさんがここで小1時間ガイドをしてくれた。勢いよく流れる溪流がある。この溪流にかかる橋を渡り、登り初めるとすぐ、竹藪があった。先着の観光客がひそひそ声で写真を撮っている。あつ、竹にぬいぐるみがくっついている。竹なんか食べちゃって、よくできたヌイグルミだ、と思いきや。跳んだ。ピョン、ピョン、ピョン。スルスルスルと上に登っていったピョン、ピョン、ピョンと視界から消えた。あれが正真正銘のマダガスカル製いやマダガスカル産バンブー・レミューだったのだ。あるフランス人のご婦人が、ここからよく見える、ああ、こっちの方がいい、と親切に教えてくれるのだが、動いてばかりいると写真も撮れないし、ビデオも回せない。こういう純粋な親切心への対応は難しい。さらに5分ほど登る。観光客が上を見ている。どうやら夜行性のレミュー（キツネザル）が昼寝をしているのだそうだ。どこにいるのか全然わからない。と、アルフォンスが、その木の下まで行って、この上だ、と教えてくれた。ずーと幹を上をたどると、... おや、また、ヌイグルミが寝ているわ。ここには、3種類のバンブー・レミューがいる。それぞれ竹の別々の部分を食べ分けているようだ。中には、青酸を含む部分もあるが、このレミューは平気で食べている。何故平気なのかは、未だに謎のようだ。多分、少し調べれば分かりそうだが、この辺、丹後はものぐさでいけない。ゴールデン・バンブー・レミューという種が最近ここで発見され、これがこの地を保護するきっかけとなつたらしい。

ちょっと登って見晴らしのいい所に出た。暖かくて気持ちがいい。二組の老夫婦がお食事中だ。ふとゴミ箱を見ると、緑色のきれいなトカゲがいる。きっとマダガスカルの固有種で名のあるお方に違いないのでさっそくビデオに撮らせていただいた。見下ろすと谷になっている所にさき程渡った川があり、その少し上に事務所が見える。あそこから来たのだ。ほんのちょっとしか歩いていない割には随分遠くにあるように感じる。おや、何か出たらしい。来た道を慌てて戻る。ああ、いたいた、またかわいいヌイグルミがいた。こんどのはさっきのとはちょっと違う。目の下の白い模様が実にかわいらしい。これは、アカハラレミューというらしい。なお、以下名称は筆者が英語から勝手に訳すこともあるので注意が必要である。他の観光客がいなくなるまで待った。そしてビデオを回す。と、するすると私の方に寄ってきた。おやおや、そのままチュツと、キスしてくれた。残念ながら目が悪かったのか、或いは良かったのか、私には

なくて、ビデオにしてくれたのだが、それにしても、うわー、なんと有り難い。感謝感激。何かいい匂いでもしたのだろうか。もしかしたら、あれは食べられるのかもと思って、ビデオに鼻を近づけたのでしょ。こういうシーンはよく動物もののテレビで見かけるけど、いつもカメラマンはどういう気持ちかな、とっていた。これは、すごくうれしい。実にうれしい。ほんとにうれしい。カメラにもやってくれないかなと欲を出して、カメラを構えたら、今度はなんとウインクしてくれた。君はかわいい、とてもかわいい。これも証拠写真があるのだ。しかし、色っぽいそのウインクにドギマギしてピントに自信がなかったので、もう一度、とお祈りした。今度は、さっと愛想を尽かされ、逃げられてしまった。ああ、これはとても寂しい。でも、いいのだ。ウー、レミューがキスしてくれたシーンがあるぞ、と本人は有頂天。ビデオを巻き戻して確認する。ああ、映っている。映ってる。もうこれで、いい。これで満足だ。もう帰ってもいいや。？いやいや、ここには、本来シファカン・ダンス（again, 丹後命名による）を見に来たのだ。これを見ずに帰ることはできない。が、それはほとんど旅の最終日のベレンティー公園までお預けとなる。

リックさんとマラガジーのお勉強をしながら昼を一緒に取った。月の呼び名はほとんど英語と同じだ。何故、フランス語でなくて英語に近いのか聞いたが、よくわからなかった。

感動の続く日本人を載せて、リック氏の会社の車、プジョー305は快調に走っている。と、前方の谷の村の様子がなにやらおかしい。なにか、キラキラ光るものに覆われている。光る胞子が降りかかり、これに覆われているようだ。或いは、のたりのたりとした春の海原が陽光をキラキラ反射させながら動いていくようにも見える。ここからでは音など聞こえないが、無数の鈍い金属的な音が、全体として一つの緩やかなトーンを構成し、その通過途上にあるあらゆる音を飲み込んでいくような、不思議な感じを受ける。リックさんも何かわからないと言う。

と、一匹バツタがフロントガラスに当たった。しばらくして、もう一匹、また一匹。えっ？まさかあれ、バツタの・・・大群？ほれ、双眼鏡、君の出番だ。・・・うわっ、間違いはない。ああ、もうこうなつては、虫笛も光玉も利かない。勢いを失い始めた午後の陽を浴びた無数のバツタが、大移動をしている。遠目には静かな移動のように見える。が、あのまっただ中は、バチバチという騒々しいまでの羽音に包まれているに違いない。

谷を覆い尽くすバツタの群。無数のバツタが作る動く空間と、人間の作る村という固定した空間が、重なり合う。小さな小さな生命体の作る空間が、人の作る集団用の生活空間を飲み込み、圧倒している。にわかには想像しがたい光景だ。が、それが、目の前で確実に進行している。自然の驚異だ。このバツタの大発生は、1960年代以降、ここ30年ほど見られなかったという。1992年、随分久しぶりにバツタの発生が見られた。これは、アフリカ大陸で大発生したバツタが、モザンビーク海峡を越えてやってきたらしい。しかし、バツタが400kmも飛べるとは、恐れ入る。漁船を踏み石のように使うのか。海原で休んで、また飛び始められるのだろうか。子供の頃、友達とバツタを水責めにしたことを思い出した。ビン一杯に水を満たし、その中にバツタを入れて栓をする。5分くらいで死んでしまうかと思ったが、なかなか死なず、よく見るとお腹の回りに空気の層ができていたので、ここで呼吸できるからバツタの水責めは無理だろうと言うことになりあきらめた。この時は結局、爆竹でアリの巣を壊した方が面白い、ということになり、アリがトバッチリをくろうことになった。1997年にバツタは再び大発生した。バツタを殺すためにも焼き畑が行われる。帽子や手掴みでたくさん取り、まとめて売っているものもある。このバツタ、おいしいという。

道に袋を並べて、小枝や炭を売る者がある。一袋数十円のために木が伐採されていく。それが、ここに生きる者が取らなければならない方法なのだ。自分の課題として、心に留め置こう。何かよい知恵が出てくればよいが。

8月17日（月）

朝7時30分出発。8時、銀行で両替。クレディ・リヨネがある。200FF代えると、180000Fmg分になった。お札はホチキス止めしてあった。午前中、製紙工場に寄った。「紙漉きこうば」と言った方が感じが出るかもしれない。和紙だ、これは。

その後UFO岩を見て、走りに走って、高原に登ったような感じの所で、そろそろ昼デモと言うことになった。ピクニックボックスで食事だ。途中で買った11のコーラを飲む。

昼下がり、のどに沁みいる、コーラかな

おや、この穴はなんだろう。あっ、リックさんの様子がおかしい。ここはやめようと言う。これは、もしかして、お墓の穴？そうだという。死者は5年だったかに一度掘り出され、現在を生きる者達に囲まれる。だから、死者はとても近い存在だ。逃げるようにその場を立ち去り、別の木陰を探して、昼だ。ただのフランスパンと牛肉、サラミ、鶏肉、に塩と胡椒をまぶしただけなのに、朝を食べていないせいもあり、うまい、うまい。Hungry is the best sauce. とはよく言ったものだ。ムナジロガラスが、2羽我々の食事を見守っている。ごめん。全部食べちゃった。残り物はないよ。

イサロ公園に着いた。むき出しの岩が何とも言えず荒涼とした景観を作っている。これまでの赤の大地とはまったく印象が異なる。非常に感じのいいホテルにチェックイン。あっ、カメだ。星ガメがいる。二匹。一匹がこっちを見ている。私が動くとカメの頭もそれにつられて動く。ちゃんと見えるんだね。大丈夫、私は、ガラパゴスのゾウガメとは、マブダチなんだよ。君の味方さ。

部屋は、バンガロー11号室。蚊帳がある。荒涼とした岩場であって、木の優しさを感じさせるこうしたバンガローは、ほっとする。ここは、センスがいいと思う。夜はお湯が少なくなる、と受付の180cmはありそうな女の子が教えてくれたので、日没を見に行くまでの間にシャワーを浴びてしまった。

フネートル（窓）に、日没を見に行く。どんな窓か想像がつかない。随分太った、ゆっくりと飛ぶトンボがいる。と思ったら、例のバツタだ。あんなに長いことバツタが空中に滞留してられるなんて驚きだ。もしかしたら、我々はバツタに追いかけられている？

フネートル。高さ数m、厚さは5mにも満たないのではないだろうか。その位の厚さで、これまで風雨に屈しなかった固い地層部分が直立している。この固い地層が1kmほど点々と続く。丁度人の目の高さくらいの所に、穴の開いたところがある。これが、フネートルといわれる所以だ。ここに日が沈む。時刻は17時半、といったところだ。おや、いつの間にか蚊にやられた。マラリアは、大丈夫だろうか。日没後、窓だけ見に来た観光客がいた。2組も。日没見るならもう少し早く来なければね。

日没を、見るなら絶対、時間厳守。お日様は、フレンチのエゴ、知らんぷり。

部屋に戻って、夕食までの間、小一時間仮眠した。なんだか、すごく疲れている。食べ物が少ないのかもしれない。夕食は結構いける。焼いたパンがおいしい。スープは、スパ入り、焼きパン入り。メインは牛肉にクリームのかかった野菜。そしてコーヒーもうまい。

夜、星が凄い。天の川が恐ろしいほどくっきり見える。が、数が多すぎて、南十字星も何もわからない。あんなに分かりやすいはずなのに。惑星も多分、あれが木星と金星、赤いのがもしかしたら火星かな、と言う程度で全然自信が持てない。バルブ開けっ放して写真でも撮ろうと思い外でふらふらしていたら、お巡りさんに注意された。それもただのお巡りさんではない。大きなシェパードのお巡りさんだ。シェパードを連れてお巡りさんではない。犬のお巡りさんなのだ。最初、遠くで犬の声があった。犬が喧嘩でもしているのだろうと思った。だんだん近づいてくる。犬の喧嘩に巻き込まれてはたまらんと、一旦バンガローの部屋に戻る。と、犬の声はしなくなった。ああ、治まったと思い、外に出ようとすると、声が近づいてくる。部屋に入る。治まる。おかしい。もう一度外に出る。今度は少し出歩いてみる。ホエ声は凄く近い。ああ、これは間違いなく私に向かって吠えているのだ。外に出るな、ということらしい。なるほど、シェパードは、こうやって羊を誘導するのだ。羊扱いされて見て、なんだか羊の気持ちがわかったような気がした。

8月18日（火）

今日は、「イサロの泉」を見に行く。「イサロの泉」というのは、私が勝手に命名したもので、フランス語では「天然プール」と記されている。いかにも自分のリゾートという扱いをした名前では私には気に入らない。大体、現地ではその水を飲み水に使う人もあるのだ。尊重すべきだ。

朝8時。イサロ国立公園事務所でガイドを雇う。何か皆、日本人の私とお友達になりたがっているようだ。ここには、お金の儲かる呪文があり、多くの人がそれを知っているようだ。長老格のジサマが、その呪文を唱えた。

「コクリツコウエン、ニ、イキマシヨ。」

英語のできるガイドは皆予約済みという。英語の出来ない若いガイドを雇うが、ドライバーのリックさんも一緒に来てくれると言う。有り難たい。まず、軽く登ると後は、ほとんど平坦だ。高いところに洞になったところがあり、石が積んである。バラ族のお墓だという。上からロープで伝わって棺を置くそうだ。道ばたに生えるk i t aという木は毒があるとガイドが教えてくれる。ところどころ枝に茶色のアリの巣がある。バオバブもあるが、ここは盆栽のように小ぶりだ。黄色の花がまぶしいほどの可憐さで咲いている。アロエもある。石をはぐとサソリがいた。ああ、本物の生きているサソリは初めて見た。尻尾の先に白っぽい液がある。これが、毒なのだ。この毒を抽出して何かに悪用しよう、とは思わなかったが、億の一つぐらい人類を救うような薬になる成分があるかもしれないので、分析してみてもおもしろいだろう、とは思った。

サソリには赤と黒がいて、どちらかがより強力な毒を持っているという。運転手とガイドの間で説が割れてしまったので正解は分からない。刺されて、命を落としたらそれが強い方で、命にまでは別状がなかったらそれは弱い方ということだ。ワニやカメ、ミイラ男の頭にそっくりな岩がある。少し高くなっているところに登って、下を見回す。

気宇壮大、雄大な感じになる。

おっと、誰だ。こんなところにキャンプ場を作ったのは。排水が地下に浸透して、泉まで汚染するではないか。大抵地元の人、このキャンプ場を使わないようお願いしているというじゃないか。一部の思い上がった白人がこういうことをするのだ。あのキャンプ場はすぐに廃止すべきだ。少なくとも、泉の下に移すべきだ。

と、水の音が聞こえてきた。ああ、こうした荒れ野で聴く水の音は格別だ。結構な勢いだ。相当の水量があるらしい。下に降りてゆく。ああ、これか。これは、美しい。隠された砂漠のオアシスだ。椰子が生い茂り、植物が存分にくつろぐほど育っている。緑。緑。緑。えっ。ガイドが、何の前触れもなく、お尻が半分くらい見える競泳用の水泳パンツ一丁になって泳ぎ始めてしまった。しかし、地元の人が泳ぐのなら、私には何も言うことはない。勝手にしなさい。彼は潜って何かを捕まえたらしく、私のそばにそれを放った。水生昆虫かと思ったらカイガラのネックレスだった。いろいろな人が泳いで、落としていくのだろう。彼は二つ拾った。きっと彼の副収入になるのだ。ミズスマシがグルグル円を描いている。魚もいる、糸トンボも赤トンボもいる。実に、実にオアシスだ。オーストラリアのキングス・キャニオンも凄かったが、こちらの方が広大な感じがする。全体の大きさは分からないが、人の歩けるところだけを見ると、そういう印象を持った。

しばらくすると、フランス人のおばさんが一人やってきた。私のガイドとなにやらフランス語で話している。実は、私がフランス語を話すかどうか聞いている。彼は英語しか話さないの、それはあなたも大変ね、と言っている。その位のフランス語のヒアリング力は、私にもあるのだよ、おばさま。でも人の悪い私は、フランス語のフの字も分からないフリをした。どうせろくなことはないのだ。と、彼女は、フランス人らしくあらぬ上手な英語で私に話しかけてきた。「これからどこに行くのですか?」「チュレアルまで。」「あらそう、実は私も行きたいと思っているのだけど、車が見つからなくて。あの、後でお金払いますから載せていってけません。」そらきた。しかし、断る訳にもいかないだろう。正直に言うと内心ではあまり歓迎はしないのだ。見も知らぬ女性と一緒にどうしてもあらぬことを考えてしまう。いやいや、あらぬことというのは、決してえいちなことではなくて、その人の境遇やら、旅の理由やら、といったことだ。全神経をマダガスカルの大地の色彩や植生の変移、民族や動物達の匂いや動き、音に集中させようとする上で、これは、雑念になる。修行中の五右衛門ならわかってくれるでしょう。しかし、一人で旅をしている、彼女のその点を評価し、同じ境遇にあるものとして最大限の助力をしようという気になった。ただ、もう一つ正直に言うと、私のヒアリングが正しければ彼女は予め我々の行く先がチュレアルであることをリック氏に聞いていた。もしかしたら、とにかく誰でもいいから旅の道連れがほしかったのかもしれない。もしこれが男性だったなら、OK、じゃあ2000フラン（4万円強）、と冗談でまずタカリの精神を戒めた上で50フラン（千円）位で手を打つただろう。私はただでいいが、リックさんへのチップになるからだ。でも女性からはお金を取れない性分なので、「後ろの席が2つ空いてい

ますから、荷物も含めてそれに治まる範囲であれば、私はいいですよ、でもリックさんの了解が必要です。」、とやや事務的に答えた。保険の問題など後で出てくると困ると思った。後で思わぬ事が起きた場合、文化や社会的な背景の違いもあるのだろうが、フランス人はよくゴネルから気をつけなければいけない。リックさんは、問題ないと言う。それでも念のため「リックさんはエクセレントな運転手だが、仮に何か事故があっても彼も、彼の会社も、私も責任をとれませんよ、」と確認した。言うてから、何か冷ややかな契約ごとをしているようで嫌な感じがした。が、彼女はニコニコしながら、「もちろん、じゃあ決まりね (deal)。」と言った。もののテレビでは、全て条件が整ったところで、取引成立！という意味でこう言うので、これで交渉事は一件落着。

結局後で彼女を拾って、一緒に南下することになった。

その前に博物館に寄った。昆虫採集の成果が、ガラスケース2つにおさめられている。オオゴキブリもピンで止められていた。でも糸トンボはない。イサロの泉で見た糸トンボは、きっと新種に違いない。少し干涸らびたパンフレットを買うと、有り難うございます、有り難うございます、と3年振りに日照りを破った雨のようにたいそう感謝された。

リック氏が彼女を迎えに行っている間、一人で昼食を取っていると、フランス人の男性が近づいてきた。今度は、何を頼まれるのかと思ったが、歴史は繰り返す。フランスなまりの英語で、お見受けしたところお一人でご旅行のようだが、よかったです我々を乗せていってくれないだろうか。どこまでいくのですか？と聞いてきた。チュレアルまで、と答える。彼は「それは、奇遇。」とは言わなかった。そうですか、それは残念でした。我々はチュレアルから来たのです。北に行く人を捜していたのです。と言って、あきらめよく彼は立ち去った。無計画なのか、ケチなのか、どうもよい印象を持ってない。実は、マダガスカル人の中では、フランス人の印象は必ずしもよくない。彼らは、あまりお金を落としていかないからだ。ケチケチ旅行を完遂できる言葉の強みがあるようだ。それが良いか悪いかは別にして、アメリカ（ないし、アングロフォン）、イタリア、ドイツ、そして日本あたりがマラガジーに評判のよい旅行者だ。

途中で、恐らく生まれて初めてかつ最後と言えるかもしれない、フランス人にお世辞のような冗談を言われた。行く先々でバッタの大群に会うので、我々はバッタの大群に追いかけているのかもしれない、と言うと、彼女は、あなたに惹かれて追いかけているのよ (They are following you because attracted by you. 英語としての正誤は別にして) という意味のことを言った。私のこれまでの経験では、フランス人は、この種の多少とも相手に耳障りの良い冗談を決して有色人種に対して言うことはなかった。むしろ、あたしに惹きつけられているのよ、とでもいわんかのような過剰な自信を漂わせるほどだ。この冗談の解釈は難しい。が、聞いて悪い気持ちのしない冗談だったので、お構いなし、としよう。待てよ、私は、エサ、という意味だったのだろうか？まあ、いい。お構いなし。

夕方、チュレアル着。実は、今日の最終予定地は、ここではない。もう25キロ北の ifaty という街まで行くのだ。ここで、おばさまとさよならをする。いくらお支払いしましょうか、と彼女が言う。私はお金はいりません、リックさんに心付けをあげて下さい、と言った。リックさんがいくらもらったかは知らない。ここで、一旦リックさんともお別れだ。チュレアルから先は、海岸の砂丘を走るので、トヨタの4wdに乗り換えて行く。なんと私とドライバーの間には、ホテルに届けるという卵様が鎮座している。一段に40個位の卵様が三段ベッドでお座り遊ばしていらっしやる。後ろに載せた軽油カン様は私がどうころぼうと被害を受けないだろうが、このお卵様、大丈夫だろうか。しばし、卵を見つめる。「コレ、アナタノ食事」、とドライバーが言う。「オナカスイタラ、イマ、タベテモ、イイ」、と言う。生卵のようだが、こちらの人は生卵食べるのだろうか。アフリカのどこかには確か、すこし発生が進んでヒナの実体ができるところで卵を食べる風習のあるところがあったと記憶しているが、ここではないだろうね。とにかく。激しく揺れる4wdの中で、全身をつつかえ棒のようにして座っていたので、なんとか卵をつぶすことなくホテルに着いたが、疲労した。ホテルに着いた時は、ドンピシャリのタイミングで、日が落ちるところだった。マダガスカルの日没は、世界一と言われる。それはそれは素晴らしい陽の入りを見ることが出来た。水平線には雲が一つもなく、お日様の全身を最後まで見る事ができた。

イファティーの夕陽が始まった。

赤が燃えている。

海が負けてしまうのではないかと思うほど、力のある夕陽。

めらめらと、ゆらゆらと、艶のある赤が、しかし、少しづつ海に沈んでいる。

最後のエネルギーを全部分け与えようとするように、思い切り、燃えている。

光沢のあるくっきりとした紅色が、全てのものを照らし出す。

世の全てが、彼の輝きに染まった。

今や、陰すらも彼に服従している。

彼は、たった一つの色で、世界に君臨している。

と、王が、ある瞬間から、力を弱めた。

ほんの少し紫色が入ったようなやさしいピンク色になった。

海の水で薄めたように、ほんのり、とした。

戦いが終わったように、落ち着いて。

ああ、いい色だ、と思った。

夜、3人組に襲われる夢を見た。私は胸のところを刃物で斬りつけられ出血したが、すぐにこの三人から離れることができ、安全だった。これは、ホテルの私の部屋の前にいた三人の工事のおじさんの目つきが悪かったので、夢に見たのかも知れない。実は、私の解釈ではこれは予言性のある夢だった。司馬先生によれば、夢を語るというのは痴人のすることというので、痴人の私は安心して夢のことを記している。私の見る夢には、二種類ある。その日の出来事を焼き付け直す作業としてのただの夢と予言性のある夢だ。人には、現在の科学ではっきりと知られていない能力、ないしうまく開発されていない未知の能力があり、少なくとも予知能力はその典型例だと思う。その99%がまやかしてあっても、自分の経験は自分では信じる他無い。私は世界中の笑われ者になろうとも、この信念を曲げるつもりはない。自分の経験は欺きようがないのだ。二十何世紀になって人類が生存していれば、きっとこの能力をおかしな、得体の知れないものとしてでなく、科学の対象として考えるようになっていくと思う。考えて見れば、正確な記憶や将来の約束事ができるという能力は、他の動物から見れば、驚嘆すべき未知の能力といえるかもしれない。現代人にとっては、例えば3ヶ月後にどこそで会う、ということは当たり前に行き先が実行可能なことだ。それができる者、その能力がある者にとっては、極めて普通のことだが、その能力が無い者（例えば、ネズミ君と3ヶ月後に、どこそで会おうと約束するとか。）にとっては、そもそもそれが理解できない。そうした能力は、その者にとって、この世に存在しない、或いは、嘘や誤魔化し の間のどこかに位置付けられるだろう。この時代ではきっとただの笑い者になり、全人格的に相手にされなくなるだろうが、これまで無数に生じてきた、時代に先んじて生を受けた者の悲劇になぞらえて、自分を慰めようと思う。

8月19日 (水) 天国と地獄

よし、今日はシーラカンスを釣ってやろう、と思い、釣りをしたいと受付で言った。シーラカンスは、確かツヅリが随分違うし、この発音では通じないと思った。案の定通じなかった。が、とにかく、大きい魚と言った。両舷に補助リガーのついた船外機付きのカヌーが準備された。MOROTO号TU96007。ツーがクローして、007に助けられるという意味だ。これは本当だったのだ。

カヌーは海原を快調に進んでいく。大波が砕けているリーフの近くまで進むと操舵手が、仕掛けを海に投げた。針が大きい。ルアーも30cm位ある。以下独り言。シーラカンスというのは、全くの法螺で、私は50cm位のが一匹でも釣ればそれでもう十二分に満足なのですよ。そんなに大きなルアーだとそれを食べるような魚は少なくとも1mにはなるんじゃないですか？そんなのが、かかったらどうしよう。いやあ、実はなんかあんまり大きい魚は、関心がないと言うか、50cm位のがいいなあ。このカヌーだってそれほど大きくないし。大きな魚、暴れると、いろいろと困るかも知れないし。大きい魚は、そっとしておいた方がいいような気がするなあ。小さいのが、ちょっと釣れば、それでいいんですけどねえ。

ということで、心の半ば以上、釣れない方がいいな、と思い始めるようになった。で、結局その思いが通じて、一匹も釣れなかった。今日は波が高くて釣れそうもない、と操舵手が言った。付近に、色の違うところがあり、あそこは何かと聞いてみた。珊瑚礁だという。とても浅く、50cm位だという。サメは？と聞くとこんな浅瀬にはこれないと手振りと言った、と思う。パーフェクト！スノーケリングをすることにした。マスクは借り物だが、スノーケルは自前だ。「ゴースポ」で出発の前日に買ったものだ。何かに刺されるといやなので、Tシャツを着て、ビーチサンダルを履いたまま海に入った。もちろんそのために踵で止まるタイプのを買ったのだ。しかし、ちゃんとクロールで息継ぎも出来ない癖にスノーケリングをするというのだからね。もう少し身の程を知れと父に叱られそうだし、命を大切にしないかと母に怒られそうだ。まだ午前中の10時半頃で少し水は冷たく感じられた。

天国。

魚の楽園がそこにあった。ブルー、赤、黒、緑、黄色、ピンク、白、茶色... 派手で美しい模様に身を包んだ魚達がそこでもここでも自由にゆらゆらしている。あるものは、珊瑚の適当なくぼみに隠れるように、あるものは、何もかくれるものがないところで大胆に遊泳している。ヒトデやなまこ、大きなうみうしなどもいる。中には、まだ寝ぼけて、サンゴに頭をぶつけているのもいる。もう11時になるというのに。休日の私のような。そうか、皆さんは毎日が日曜日なのだね。ああ、カワハギだろうか、頭を海面に向けて気持ちよさそうにエステをしてもらっている。エステーションは、ホンソメワケベラといっただろうか。青緑のこれは、ブダイの仲間だろうか。あつ、小さなゴミかと思っていたら、この海中に無数に漂っているのは、魚の稚魚ではないか。これは、すごい。うわー、大きくなると何になるのだろうか。黄色と黒のツノダシの幼稚園がある。30匹位居るだろうか。かわいいものだ。おや、ここからは急に深くなっている。水も冷たい。分相応に珊瑚の回りにへばりつくようにしていないと。いやあ、しかし実にきれいなものだ。

この間小一時間あっただろうか。フィンもつけず、ほとんど腕力に頼るようなことをしていたので、船に上がるときが一苦勞だった。二の腕の力が足りない。結局、サメかなんかがひきあげられるような格好でカヌーに引き上げてもらった。はずかし。。

ここは一日だけの滞在だが、こんなところに1週間も居たら、人間が贅沢になって困るだろうな、と思った。

陸に戻った。午後もう一度海に入ろうか、迷う。あまり欲を出しては良くない。しかし、折角の機会でもあるし... 取り合えず、午前中の料金を払いに行った。3時間分を2時間にした上で、端数を捨ててくれた。釣れなかったので、特に安くすると言うことらしい。しかも、もしよかったら、午後小一時間カヌーのセイリングをタダでプレゼントするという。そういうことなら、お言葉に甘えて。

で、今度はビデオを持って、自動車に乗るような軽い気持ちでカヌーのセイリングに参加した。他にも若いフランス人が3人、この恩恵に与るらしい。3人、というのが気になったが、彼らはカイトやら、ウインドサーフィンやらいろいろとエキストラでホテルの遊具を使っており、いいお客さんらしい。彼らは水着だ。私も海パンにタオルを羽織るくらいの方がよかったかな。

順調に帆を揚げ、スタート。朝とは変わって、波もほとんどない。5人も載せているのに結構なスピードだ。気持ちがいい。朝は引き潮だったが、今は満ち潮だ。おや、足下にいつの間にか水が溜まっている。その昔、こういう帆付きのカヌーで、はるばるインドネシアからやってきたのだろうか。確かに、こんなカヌーでも風に恵まれれば、相当遠い

ところまでいけそうだ。半分まで来たということだろうか、向きを変える。今まで頭の右側にあった帆を、左側にするため帆をくぐる。おや、この隙間からたまに来る高目の波を切る度に、水が漏れ入ってくる。大丈夫だろうか。ひどいカヌーだと思いながらも、この浸水を面白がってビデオに撮る余裕が、この時にはあった。ちょっと心配になって、水を汲み出すものを探す。無い。そういえば、救命胴衣もない。これは、まずい。私はビデオを片手にした普通の格好だ。およそ海原のカヌーにふさわしくない。この格好から泳ぎだしたら、ダリも自慢の髭が逆立つほどビクビクするかもしれない。後ろの操舵手にこれ大丈夫かと、浸水を指さして聞いてみる。彼は、ちょっとビクビクしたようだが、大丈夫と言って、手で水を汲み出し始めた。手なんてたかがしれているが、私も念のため手伝った。昔、お風呂に洗面器を浮かべ、これをじわじわと沈めて遊んだことを思い出した。片手で一杯また一杯と洗面器にお湯を入れていき、自分が風呂の熱さに耐えられなくなるのと、洗面器が沈むのとどちらが早いか、競争したのだ。あの時は、なかなか水が溜まらずのぼせてきたので、両手でバチャ、バチャとずるをして一気に洗面器を沈めてしまった。あの時の洗面器のようにカヌーの踏ん張りを期待したい、などとひとつごとのように言っている場合ではなかった。しばらく様子を見たが、しかし、どう計算してもこのペースでは、元の場所に戻るよりも、浸水がカヌーを満たしてしまう方が早い。難しい速度や球体の容積の方程式を解く必要はない。どう見ても、えらい勢いで浸水しているのだ。これが試験の問題なら、乗員がカヌーで無事陸にたどり着く、という選択肢は真っ先に消去だ。どうひいき目に見てもカヌーが水で一杯になるのにそう時間はかかりそうもない。後ろの操舵手が、前にいた若い船頭と大きな声でやりあい始めた。これは、本当にまずいのだ。後ろの操舵士は、櫂で、水をバチャバチャ汲み出し始めた。若い船頭が海に飛び込み、泳いで後ろに回ってきて様子を見た。顔がまじめだ。まずい。どうなるのだ。海に放り出される？これは、実に、実に危ない事態だ。海に放り出されたら、どうするのだ？真剣に考えなければならない。パニックになるのが一番怖い。冷静になろう。安心材料を探そう。ああ、ズボンの裾を縛って、救命胴衣代わりにする方法を前にテレビでみたことがある。それに、このカヌーは全て木製だし、しばらくは浮いているだろう。午前中とうってかわってナイデいるのもよい。近くに他のカヌーがいくつも見える。これが心強い。50m位岸に寄った所に少し色の違うところがあるが、きっと午前中と同じような珊瑚礁に違いない。干潮の時に深さ50cm位、場所によっては20cm位だったが、満潮の今、どの位だろう。1m水位が上がっているくらいならば、足がなんとか付くだろう、しかし、…。それにつけても、一番の問題は、ビデオだ。えらいことになった。ただほど高いものはない、とはよく言ったものだ。まったくえらいことだ。しかし、いつまでたっても操舵士は、カヌーを陸に近づけようとせずに、水をかき出している。私は、少しでも岸の近くに寄せることを考えたらどうだと、言った。通じない。こういうのが、一番困る。彼はほとんど私を無視して、水の櫂だしに忙しい。岸に向かいながら、同時にかいさせないのか、と言ったが、通じない。ああ、そろそろ腹を固めなくてはいけないようだ。ビデオは、アウトリガーとのつなぎの木に縛り付けるとしよう。手に持ったまま泳ぐほどの自信はない。落としてしまうかも知れない。カヌーにくくって置いた方が、回収の確率も高いだろう。水は、ぬるい。冷たい水でないだけ、タイタニックよりは条件がいい。おお、この現実に行きつつある事態をタイタニックと比べなければいけないとはなんと絶望的なことか。しかし、水が暖かいというのは、圧倒的にいい条件だろう。近くのカヌーが助けに来てくれるまでの数分間（カヌーはかなり早い速度で移動できるので数分と見た。）は、木の浮力に頼りつつ、立ち泳ぎをしなければならないのだろう。或いは、カヌーに泳ぎ向かってもいいだろう。しかし、きっとその時間はとてつもなく長く、距離はとてつもなく遠く感じられることだろう。陸地まで泳ぐというのは、最後の最後のオプションで、そこまでは必要ないだろう。しかし、何か悪いことでもしたのだろうか。いろいろと人にお世話になりすぎたのかもしれない。ああ、お盆に釣りなどしようとしたから、罰が当たったのかも知れない。げげっ。サスペンダーをしていない。金具が潮に濡れてさびるかも知れないと思い、わざわざはずしてきたのだ。余計なことをしてしまった。サスペンダーさえあれば、こんなことにはならなかったはずだ。これは、まずい。本当にまずい。サスペンダーがないとなると事態はもっと深刻になるかもしれない。ああ、サスペンダーの神様、もう二度とサスペンダーをはずすことはしませんから、許して下さい。……

と、左舷から突然カヌーが現れた。ものの10mと離れていない。櫂を操るその二人組がなんと神々しく見えることか。信じられなかった、自分の目が。私のところからはきっと帆の陰で見えなかったのだ。が、操舵士には見えていたのだ。だからプライオリティーを水の汲み出しにおいて私を無視したのだろう。まず、私に、あっちに移れと言う。ああ、なんと。あっけなく助かってしまった。私は、ビデオも持っているし、普通の格好なので特に優遇されたのかもしれない。残りの3人組も乗り移ってくるのかと思ったが、彼らには何も言わない。私が居なくなった分、浸水を起こ

したカヌーへの負荷が減り、助っ人カヌーからペットボトルの切れ端を借りて、櫂と一緒にどンドン水を汲み出し、これなら大丈夫ということで、他の3人は、元の船に乗ったまま岸へ向かうことになった。私は、そんなにデブだったのだろうか？いや、あの一番前のあんちゃんの方が、ぶよぶよして重そうだぞ。しかし残った3人の、俺達も一緒にその船に乗せてくれよお、というあの目が忘れられない。私は、悪いことをしたような罪悪感に包まれてしまった。助っ人カヌーの連中に、あっちは大丈夫かと聞く。何も答えず、一度だけうなずいて黙々と全力を込めてカヌーを陸地に向けて漕ぎ出した。実は、危ないんじゃないのか？そうか、ピストン輸送するのか。でもそれならもう一人、こっちに載せておいた方が合理的なのに。三人組に後でしこりが残るといけないから、三人は一緒と言うことにしたのかな。ならば、私一人を元のカヌーに残した方が良かったのじゃないか？合理的でない。とにかく二人が全力で漕ぐカヌーは早い、早い。イケー、イケー。さっきまでの恐怖が嘘のようだ。そして、ものの数分で、ザ、ザーと砂浜にカヌーが軽く乗り上げた。ピストン輸送はしないようだが、元のカヌーも近づいてきている。もう大丈夫だろう。

再び陸地を踏みしめた時に、ああ、怖かった、という想いが一気に襲ってきた。一部始終を見ていたのか、陸ではすでに何人か、沈みかけたカヌーの到着を待っており、彼らと操舵士らは口論を始めた。

筆舌に尽くしがたい感情のうねりを経て、ビールを喰らってお昼寝をすることにした。のんきな夢を見たり、少し意識が戻りさっきのは実は夢だったのじゃないかと思ったり、いずれにせよ、今、陸にいることに安堵したりと、うつつの世界で行ったり来たりしたようだった。

夕暮れ時、海岸を散歩した。水平線上にある、弓なりに力強く風を受けたカヌーの三角帆が美しい。白い砂浜。ところどころに黒い岩。スジガイ、タカラガイ、二枚貝。巻き貝の動いた後は、ブラウン運動のようだ。ごみがまったく見あたらないのがいい。波が引くと、貝殻の両脇に線が残る。

太陽が、その全身を少しづつ、少しづつ水平線の下に落としてゆく。太陽が姿を隠すと、明日のために海は眠りにつく。

発電器の音が低くなると部屋の明かりが暗くなる。と、いきなり停電した。10まで数えてなおらなかつたら、ローソクを点けよう。．．．55までがまんしていたら再び点灯してくれた。

テーブルの上にまた、アリがいる。きっとテーブルはアリにとって絶好のエサ場なのだ。さて、夕食にでも行こうか。夕食はイカのフライ、トリと米、デザートは、チョコに卵の白身をホイップしたものを溶かしたやつ。うん、うまいうまい。

ヤモリが鳴いた。一匹見つけたのは、最近尾を落として逃げたらしい。でもあれ、何回位できるのだろうか。は虫類ほどの高等生物で失われた体の部分が再生するというのは凄いことだと思う。

しかし、今日は天国と地獄の一日だった。

8月20日（木）

朝、きれいな鳥の声で目が覚めた。海岸を散歩する。3人組の6～7歳のかわいい女の子に、このきれいな貝を買ってくれとねだられる。天真爛漫な女の子の、真っ黒でまんまるな目を見て、「君のひとみは、その貝なんかより、ずっとずっと、素敵だ」とマサカズ・タムラなら言うのだろうが、．．．これはガラパゴスの章で使ったネタだった。残念ながらお金の持ち合わせがない。じゃあ、ボンボンをくれと言う。それも持っていない。フランス語をしゃべらないせいだろう、イギリス人かと聞かれた。いや、日本人だ、と言って、日本は、ずーとあっちの方にある国だと、北東を指した。しかし、南半球ではどうも北を通る太陽の軌道が頭を混乱させてくれる。つまり、太陽に向かうと、右手に昇ったお日様が、左手に沈む一なのだ。バカボンの世界はあるのだ。ただ、日が昇るのは東で、日が沈むのが西と語っているが、ありようは、あのアニメーションの通りだ。別れ際に、チャオ、と言ったら、彼女らはその言葉をおもしろがって何度も繰り返した。どうやら、日本語だと勘違いしたらしい。御同朋、どうぞチャオと言うマダガスカルの子に遭遇したら、チャオ、と答えてあげて下さい。きっと彼女たちも喜ぶでしょう。

ダイハツの車で、チュレアルまで戻るが、相当酷使していたらしく、途中で、後ろの横開きのドアが開いてしまった。荷物が危うく落ちそうになった。手を伸ばして、荷物を押さえる。と、空いたドアから紐が出ており、都合がよいので、それでドアを引っ張り続けた。でもなんで、こんなところに紐がついているのだろうか？考えるまでもない。この紐は、まさにその後ろのドアが開いてしまったときに、後部座席の人が、それを引っ張ることで、ドアが開かないようにするための工夫だったのだ。必要は発明の母だ。コットンを運ぶ車とすれ違った。えらく頑丈に見えるが、コットンを運ぶ程度のことにあれほど頑丈な車がいるのだろうか。おっと、危ない。人を轢きそうになった。避けきれず、人がサイドミラーに当たった。プスプスとも接触しそうになる。急ブレーキだ。運転手さん、ゆっくり走ろうマダガスカル。少し腰をかがめて洗い物をする女性がいた。ふっと、車を見たときの目、生き生きとして実にいい。おや、ブタ君が、なにやらうれしそうな顔をして、鼻で食べ物を探して歩いている。何かいいことでもあったのだろうか。こちらまでうれしくなってくる。実は、ブタ君のうれしそうな顔を見て、長いこと心にひっかかっていたツカエのようなものが少し和らいだ。それは、デンマークで模範的とされる農家で見たママブタの何とも悲しそうな顔とコブタの何とも不安そうな目だった。だらしなく垂れた耳と光彩を欠いた瞳。彼女らは、一生をある小屋で過ごし、その生命は飼い主の判断によって、ある時突然に取り上げられてしまう。しかし、世の中にはこのブタ君のようにうれしようにエサを探してほっつき歩くことのできるブタもいることが確認でき、人類としてこの愛すべき家畜に対する罪悪感が少し軽減されたのだ。ぶた君はかわいいよ。

飛行機で、フォー・ドファンについた。あれ、K藤静香がいる。うそ．．．よく似ている。高そうなサングラスをかけたお付きの人も何か普通の人とは雰囲気が違う。これは、いつか聞いてみよう。静香さん、見ましたよ。マダガスカルに行ってたでしょ。でも、どうやって聞くんだけ。それに人違いだったら、恥ずかしいゾー。

フォー・ドファン、英語だとフォート・ドルフィン、イルカ砦だ。座礁した船が湾内に3隻ほど見える。激しい波に、朽ちつつある船体を曝している。凄い迫力だ。ドラマが伝わる。

ブレイク・ニュース（ニュース速報）。

ここで、残念なことに愛機ゼンザプロニカが壊れてしまった。実は、すこし不調を感じていた。シャッターを切ったときの音がソフトだったのが気にかかっていたのだ。これは、相当のショックだ。どうやら、いままで撮ったのも全て、だめらしい。電子系がいかれているのだろうか。シャッタースピードや絞りもダメだったろう。2時間位いじったが、だめだ。何と。写真も撮れずに一人旅を続けるなんて、竹光を腰に差して登城する武士のようだ。まあ、ビデオがあるだけでも感謝しよう。しかし、無念だ。（速報終わり）

補足：不思議にも有り難いことに、撮った写真の多くは、それなりに見る事ができた。F値を大きくとるようにしていたので被写界深度が大きくなり、ピントの合う範囲にカバーされていたのかもしれない。

夕方ホテルにチェックイン。

鳥類の怪説のコーナー

ガイド氏が特に鳥に詳しい、つまり明らかに私より多くの鳥の名前（しかも日本語で）を知っていることが判明したので、急遽、刃を焼いて付ける。以下の怪説中、真実と冗談を見分けることは読者の見識に任されている。

- アホウドリ科 知能が低い。とにかく大きく気持ちよさそうにグライディングする。
- カツオドリ科 よくカツオを取っている。
- グンカンドリ科 よくグンカンにぶつかってくるのでこう呼ばれる。
- サギ科 よく嘘をつく。スレンダーで、ツルを小型にしたようなシルエット。後頭部がとがった感じ。
- トキ科 佐渡島のセンターで、ミドリを見た記憶がある。この科にヘラサギがいて紛らわしいが、ヘラトキだと、曲がった先のくちばしがひらたくなっているのか、ひらたくちばしがトキ特有のカーブをしているのか、嘴の形状が想像しにくい。だから、ヘラサギに一理ある。
- カモ科 よくネギ畑で見かける。
- カモメ科 カモのような目をしているからこの名が付いた。
- トウゾクカモメ科 特に目つきの悪いカモメをこう分類した。
- オウム科 嘴で体を支えて曲芸をやる。
- ヤツガシラ科 飛翔中の羽の模様がおもしろい。
- カワセミ科 川にいるセミ
- タカ科 トビはこの仲間。同業のハヤブサ科とは、飛ぶ速さで区別できる。ハヤブサの方が早い。
- カッコウ科 舌先三寸で、人心を惑わせ、他人に子育てをさせるずるい奴。
- メジロ科 目が白い。
- カラス科 ここのカラスは、胸に白いショールをまとっている。このことは、オーストラリア・アボリジニの「夢の時代」におけるカラス伝説と異なる。
- フクロウ科 頭が大きい。360度首が回るが、よく首を一回転させたまま忘れて寝ている。
- チドリ科 海岸でよく酔っぱらっている。ツバメチドリ科、カニチドリ科との区別が付かない。
- ツバメ科 アマツバメ、ウミツバメという親戚があるが、区別が付かない。

8月21日 (金) ベレンティーへ

バンガロー形式18号室。ここは、あまりよくない。まあ、レストランのボーイの態度が良いのが救いだ。暗い中、文庫本を読んでいたら、キャンドルサービスをしてくれた。

朝、8時。誰かがドアにいるような気配を感じて目が覚めた。ボーイらしかったので何のようか英語で聞いた。と人の気配が無くなった。30分後、昨日のボーイがカバン、カバンと叫んでいる。出発は、10時15分のはずだ。どうしたのだろう。まあ、いいや、後5分待ってくれば、鞆は出せる。今回の鞆は大きいので、全部投げ入れるようにしても荷造りができる。これまでのように工夫に工夫を重ねたパズルのようなパッキングに時間をとることもない。ただ、あのパッキングと、食後に限りなくかさばらないようにする機内食パズルは、旅のお暇つぶしパズルの双璧をなしており、あれはあれで楽しかった。美しく詰め込んだ時の達成感さえもいえずうれしいものがある。さて、これからいよいよキツネザルやシファカのいるベレンティー保護区に向かい、今後の自然保護政策についての意見交換だ。この保護区は私設だ。何とか言うフランス人の大金持ちが、地の果てまで続く広大なサイザル畑を所有している。かれは、自家用飛行機で島内の移動をしているようだが、この飛行場に隣接して7万haの森が保護地として守られている。フォー・ドファンの街でガイドのコラル氏を拾って出発だ。彼の名、コラルはサンゴの意味だ。日本語を勉強している。いきなり、「サンゴ」を漢字で書いてくれと言われた。俄に漢字の世界に引き込まれ、あまり自信がなかったので「三五」と書いてやった。さすがに良心が咎めたので、人の名前らしく「三吾」と書き換えた。が、後でたまたま文庫本で見付けたので、今までののは皆冗談だよと言って、ちゃんと「珊瑚」と書いてあげた。普通、外人が漢字の模写を試みる時には、書き順の概念などないから、見ていておもしろいほどだ。まず大きな線を書きそれから小さな線へと移る者、真ん中から写し始める者、あちこちでんではばらばらに写す者、全てハライの感じで芸術家のような感性で書こうとする者、字のバランスを取ろうとして勝手に線を付け加えてしまう者、…。しかし、コラルさんは、書き順の原則まで知っているようだ。偉い。小学生レベルの字の上手さはある。ということは、私の悪筆とそれほどの大差が無い、ということだ。もしかしたら、実は非常に達筆で、敢えて私の字にそっくりに似せて書いたのかも知れない。そうすると、お手本が悪い、ということになるが、それでは、一般に字が上手と言われる日本の御同朋に申し訳がない。念のため、ひらがなをひとりで書いてもらって、お手本のセイではないことを確認して安心した。

まず、途中の植物園のような所で、食虫植物を見た。これはウツボ・ノ・カズラだ、と言ったらコラル氏メモをとっていた。この植物、たらふく食っていたと見えて、元気そうだ。なるほど中には虫の死骸が一杯詰まっていた。名物「旅人の木」もあった。コラル氏がナイフで傷をつけると、水が、勢いよく吹き出してきた。それぞれの枝の元で貯水能力は2lあると言う。そんなに溜まるとしたら、驚異的だ。

この辺でオトトイ、カメレオンを見ました、とコラル氏が言う。ドライバーが速度を落とす。コラル氏は、走る車から外を見ている。止めて。車が止まる。カメレオンが見えたらしい。うそー。走る車から道ばたのカメレオンを見つけたとは、俄には信じがたい。しかし、本当だ。いた。体長は尻尾の先まで入れると30cmを越えるだろうか。大きく立派なカメレオンだ。いかに大きいとはいえ、カメレオンだって生き残りの勇者、姿を眩ます天才なのだ。それを、動いている自動車から見付けるとは。あんた目がいいねえ。感心感心、脱帽尊敬畏敬の念。カメレオン氏はオープン用の手袋のような二股の手でしっかりと木をとらえて、ゆっくり移動していく。目は、確かに片方づつ独立している。しばし、ビデオに撮った。

タコの木を過ぎる。タコの木は、幹から直接葉が生えており、変だ。マダガスカルサンカクヤシ、という固有種も教えてくれた。お腹が空いてきた頃、ベレンティーに着いた。着くやいなや、本日の会談相手に、いきなりお目にかかれた。柵にキツネザルが腰をかけている。ここにもあそこにも、たくさんにいる。あっ、シファカもいるじゃないか。シファカだ。シファカだ。後でダンス見せて下さいね。ここにはカメヤワニもいた。あるパンフレットには、これらカメヤワニを見ることができると、宣伝文句のようにしていたが、ワニの方はそれほどでもない。意味不明の丸い小さなトンネルがあったが、これは、後でカメのねぐらと判明した。三匹が仲良く一列に縦列駐車してお休みだ。

昼食。フランス人が経営しているだけあって、食事はうまい。が、ビール大8500Fmgは高い。夜は小瓶にしよう。昼食後3時から夕方6時からそして明朝7時45分からコラルさんに案内してもらおうことになっている。昼食後、3時までの間少し時間があつたので、一人で歩いてみた。

まず、オニジカッコウに遭遇した。もちろんこの時、私は彼の名前など知らない。雉のように地面を歩く立派で大きな鳥に出くわしたのだ。その名前は、大きなジ(地)カッコウという意味だろうか。頬のブルーがきれいだ。彼は砂浴

びの芸を披露してくれた。データ（スタートレックの）のように首を傾げながら、ギョーイ、ギョーイと織田信長が喜ぶような鳴き声でゆっくりと地の虫を探して歩く。

そして、ブラウン・キツネザル。ワオともシファカとも違う普通っぽいキツネザルだった。ギューギュー歯ぎしりしながら、樹上を渡っていく。一匹、お土産をくれたのがある。何か食べ残した実のようだ。しかし、実は、食べて消化しきった残りかすを、木の上から落としたのだ。他にも、雨？と思って見上げると、小用をしているのもいる。初対面早々、大きいやら小さいやら忙しいことで、まあ、健康がなによりだわね。あれ、髭面の、人間がいる。モンゴロイドだ。どうやら、著名な日本人研究者のようだ。頭を下げて会釈した。

3時から、コラルさんのガイドで歩く。彼は、山岸先生のマダガスカルの鳥のリストをコピーしたのを持っていて、日本語の勉強をしながらガイドしてくれた。シファカハ、ハヲタベル、クダモノハタベナイ、と呪文のように繰り返したり、マダガスカル ダケ マダガスカルハシナガオオハシモズ などと長い鳥の名前をコピーを見ながら記憶しようとしている。が、決してガイドの仕事をおぼれている訳ではなく、いつの間に見つけるのか、アソコニ、マダガスカル・コクロ・インコ・ガ・イル、などと教えてくれる。私は、森では鳥は9割方声しか聞こえないものだと思っているので、さえずりを聞いてすぐにその主を目で確認できる能力には、心から尊敬してしまう。ガイドの説明は続く。コノ、タマリンド、ノ、ハ、ガ、タベマス。？ タマリンド、ノ、ハ、ヲ、タベマス。そう、助詞まで正確に使えるようになれば大したものだ。

一匹のシファカが、森の小道で、真横を向いて座っている。これは、ダンスを見るチャンスかもしれない。ビデオを回し始める。少しづつ、シファカに迫る。と、やった、ダンスを始めた。一言で言えば横っ飛びなのだ。胸の辺で両手でバランスを取りながら、ピョーン、ピョーンという感じで横っ飛びしながら移動していく。足の長い彼らは、四つ足で歩行するより、こうした方が効率よく移動できるのらしい。かわいいのだ。手でバランスをとって、リズムカルに軽快に移動していく様子が実にかわいい。私は、シファカにも惚れている。あの額の白い模様がカチューシャのようで、昔の切ない想いに、胸が心地よくキュンとなる。手足の長さのバランスなど、人間に近いものを感じる。地元には、シファカは昔人間だったという言い伝えがある。

シファカは昔、人間でした。ある時、継母にいじめられて、娘は森に置き去りにされてしまいました。この娘は、森の中で、黒いマスクをかぶって暮らしました。やがて、この娘は死に、その子孫が森で暮らすようになりますが、継母への恨みは引き継がれます。それが、いつしか、人間への恨みとなって、彼らは森で人間を見ると、I will get you. と言うのだそうです。

シファカという名前は、その鳴き声から来ているらしいが、だとするとそれは、マラガジーで、捕まえてやる、という意味になる。この点は確認し忘れてしまった。私には、こもった感じでワック、ワックと聞こえるが、ファッカ、と聞こえ無くもない。ただ、シファカのシはよくわからない。

パニヤンの木がある。大きい。インドネシア産といわれるこの木は、高い枝から幹のような根が生えて下に降りてきている。精霊が住むと言われれば信じる気になる。カランコイの木もある。この葉は、丸く水分をたくさん含んでおり、カメの好物らしい。

トビが2羽、トビながら喧嘩している。何かが落ちた。木の枝？「オチタ、カメレオン」。あれはカメレオンだという。あんた目がいいねえ。ケキョケキョケキョという感じの鳴き声はニュートン・ヒタキのものと言う。以下、擬音語のコーナー。ギャギャギャ、ジージー、キッコー、キリリキリリ、チューウ・チュイ↑。順番にマダガスカル・サンコウチュウ、ムシクイ、オウチョウ、チョウゲンポー、コクロインコ、だそうだ。あんた詳しいねえ。折角日本語で名前を教えてくれて大変有り難いのですが、チョウゲンポーとインコしかわかりませんのじゃ。この点日本の教育は間違っている、のかもしれない。もっと野山に連れて行って、木や鳥の名前を教えるべきだ。あつ、そうだ。環境大臣賞付きの小学生、鳥の名前当てクイズなんてどうだろう。木の葉っぱ当てクイズもいいかもしれない。賞品はマダガスカル一週間の旅にして、もちろん言い出しっぺの私が、責任を持ってお子様を現地までお連れし、ついでにガイドもしてくるのだ。鳥の鳴き声聞き分け1級などという検定制度もいい。教材はCD-ROMで作って・・・、事業としては損するかも。短期検討課題にしておこう。おや、寄生樹のCissus Quadrangularis が寄生先の木を覆い込んで枯らしている。

ニャーオという鳴き声が聞こえる。ネコだ、と思った。しかし、現れたのはワオキツネザルだった。その学名 lemur

catta からも明らかのように、ワオキツネザルの鳴き声はネコによく似ている。しかし、ワオヌコキツネザルだとどんな動物だかわからなくなってしまうのでネコは和名では省略されたのかも知れない。ただ、ネズミキツネザルというのはいる。ネズミのようなキツネザルということだろうが、ありゃネズミだ。この道20年、マダガスカルに来て数年というおばさま研究者が、ある特定の木の上のキツネザルの群を観察している。ここには群がいくつかあるが、この群だけはあまり移動もせず、いつもこの木にいます。その群の様子を10分おきに記録しているのだという。これを人間様に対してやったら、第一級のストーカーだろう。ピンクのリボンは、キツネザルがマーキングした木に彼女が結んだものだという。そしてミドリのリボンは公園内での自分の位置を知るために25m置きに結ばれているらしい。少しツーンになったような気がする。

「ところで、」と彼女が聞いてきた。

「あなたは、熱心にメモをとっていらっしゃるけれど、何の研究をなさっているの？」

正直に言えば、旅の間はおもしろいことが記憶しきれないほどおきるので、どんどんメモを取って、頭への負担を少なくしている、ということになるのだ。しかし、丁度、ベトベトしたフランス人カップルが通りかかったこともあり、悪い癖でお芝居をすることにした。

「分子進化学に関心があります。」

大上段に振りかぶった2000%の法螺である。残念ながら頭にはほとんど残っていないが、以前、ブルーボックスを一冊読んだことがある。それだけが、このお芝居の支えとなる。

フランス人が、おや、なにやら高尚な議論が行われるのかな、という感じで私に注目した。コラルさんも、この日本人は凄いかも知れない、と今までとは違う視線を投げてきた。

落ち着いて「間」を取り、次の剣技を見せる。

「ある種間の遺伝子の距離、つまりその相違を相対的に見て、それらの進化の分岐点を確定していこうとする、あれです。」

「あら、そう。」とおばさんは、眼鏡の底をキラリとさせながらうなずく。ここで分子進化学について何か質問されたら、実はとても困る。

「もっとも、ご存知のように相対的な位置の確認にはとても優れているのですが、絶対的な基準点の確定に際しては、やはり化石の年代特定と抱き合わせでないと、」私は最後の技を見せた。もう私には、しゃべるセリフはない。

と、フランス人カップルは、なにやらわかったような顔をして頷きながらも、一言もしゃべらずに去った。よかった。しかし、ほっとしたのも束の間、

「分子進化学では、」と彼女は中段の構えから、「突き」の気配を見せた。まずい。

私は、その切っ先を素早く打ち払い、大上段の構えを改めるきっかけをつかむために、カウンターで質問をした。

「ところで、シファカは、ワオキツネザルと比べると手足のバランスやら顔かたちやら随分と違うようですが、ここには分子進化学の立場から調査している方はいますか？」本来なら、私がこうした質問をされる立場かも知れないが、何とか体を入れ替えてしまった。我ながら、ズルイ。

「私は、それは詳しくないのだけれど、...」彼女は、間合いを取りつつも打って出る機会を狙っている。次の瞬間に「少しあなたの研究を聞かせてくださいませんか？」などとバサリと袈裟切りにされないように全身の神経を集中する必要がある。とっさに上段の構えを変える妙案が浮かんだ。ギリギリまで間合いを計る。...

よし、今だ。

「私は、あのシファカのヘアバンド模様が気に入っているのです。初恋の人がヘアバンドをしていて。」

私は一気に、秘剣冗談の構えに下ろし、あばさんがこれに一瞬戸惑いを見せたのを幸い、その隙について See you later と言いながら剣を収めコラルさんを促して、歩き始めた。少し行って振り返ると、おばさんは何事もなかったのかのように、上を見上げ10分おきの観察日記を続けていた。

しばらく行くと、またもネコの声が聞こえてきた。やはり、ワオ、であった。このワオキツネザルはマーキングを見せてくれた。間寛平氏のお下品なネタにカユイノーというのがあるが、あのオリジナルは実は遠く離れたマダガスカルのキツネザルにあったのかもしれない。彼は、マダガスカルで一人、芸のネタを考えている内に、フト通りかかったキツネザルがマーキングをし、これだ！と思った、かも知れない。キツネザルは、群で暮らしているが、そのテリトリーを知らせるために木の幹などにマーキングをする。具体的にはどういう行動かって？寛平氏と同じように木に股間をこ

すりつけるのだ。

恰幅のいいフクロウが枝に掴まって寝ている。トトロによく似ている。マダガスカル、ダケ、ノ、マダガスカルアオバズク、ということらしい。

夕食時は、マダガスカルの動物について最も詳しいとされるなんとか女史のテーブルと日本人の何とか大先生のテーブルに挟まれてしまった。ああ、一人で、素人用の薄っぺらなマダガスカルの動植物ガイドブックを見ているのが、気恥ずかしい。しかし、素人なんだからしょうがない。

夜、国立公園を見て回った。が、勝手に侵入した、ことになると思う。お金を払った記憶がない。それとも夜間はタダ、だろうか。いずれにしても、監視の人はいないようで、仮に密猟の懸念があってもその未然防止は期待できない。ネズミキツネザルがいた。チョロチョロ、ピョーンですぐに見えなくなってしまった。夜行性のレミューは、スポーティブ・レミューと呼ばれるように実に敏捷だ。コラルさんの懐中電灯できえ、追いつかないこともある。お休み中のシファカもいた。コノハズクもいた。懐中電灯一本の光なのにビデオにはよく映った。星が美しく、ビデオに撮ろうとしたが、これはさすがに暗すぎた。途中、どこをどう歩いているのか全然分からなくなってしまったが、コラル氏は、着実にギターの音のする方に行き、そこでドライバーに再会できた。

ベッドに入ると、森の方から何かの鳴き声が聞こえる。キツネザルなのだろう。そう、これがキツネザルの楽園の夜。

8月22日 (土)

早朝の観察。例によって、一人歩きをしてからコラル氏にガイドしてもらおうと思い、予習のつもりで一人で園内を歩き始めた。と、30分ほど歩くと迷子になってしまった。全体の地図を見た時にそれほど難しい道ではない、とタカをくくったのがいけなかった。木の梢ばかり見てきたので道の記憶があまりない。いつの間にかどこかの民家の裏から土手を登る羽目になった。これは困った。こんなところで迷子になるとは、阿呆なことだ。ああ、ちゃんと下を向いて歩けばよかった、と思うやいなや、九ちゃんの「上を向いてスキヤキを食べよう」じゃなくて、「上を向いて歩こう」のメロディーが頭の中に流れてきて、気分が晴れた。気分が晴れると運もよくなるようで、登った先は、公園敷地への入り口となるゲートの少し外側だった。迷子になったと説明するのももどかしかったので、門番さんにうなずきかけて、堂々と、門のバーを股いで再入場した。先の日本人の先生の一味と思ってくれたのなら有り難い。お構いなし、となったが、この迷子のせいでコラルさんと会うのが少し遅れてしまった。すみません。

トビやらムナジロカラスやらが多数見られる。これだけいるとなると、食物連鎖でその下に位置するものも相当いることになる。

フォー・ドファンで一泊。インド洋からの風がもろに吹き付ける。土産物屋を二軒見て回ったが、あまりいいのがなかった。マダガスカルは、どうも犬がうるさい。道ばたでゴロンと横になっている犬の顔は、ちゃんと木陰に入っている。あれあれ、可哀想にビッコを引いているのもいる。車が通ると、大抵の生き物は逃げ去るが、犬だけは時に向かってくるので、気を付けなければいけない。

8月23日 (日)

フォー・ドファンからタナに。タナの空港でリックさんと初日に迎えに来てくれた日本語を話せるガイド氏（名前は長かったので忘れてしまった）に再会。なんだか懐かしい。タナでまた一泊する。チェックイン後、すぐに動物園に向かった。タクシー代は10000Fmgだ。今日は日曜日なので、家族連れがたくさんいる。子供もうようよい。インドリを見ることが目的だった。アイアイも見かけたが、夜行性のためほとんど奥にこもっており見れないというはなしだったので、これはあまり期待していない。小さなオリにそれぞれの種類のレミューが2~3匹ずつ飼われている。動物園にも、飼育される動物から見て快適なところとそうでないところがあるものと思われるが、ここのはあまり、上等ではないような気がした。あまり目立たないように、ビデオでイロイロなレミューを撮った。それでも、めざとい連中は、ビデオを撮っているアジア人を見付けてしまう。あれ、あれ、と最初の一人が仲間知らせ始める頃には、場所を移るようにした。

シロクロの犬のような大きなのがいた。とてもレミューの仲間には見えなかったが、あれが、インドリらしい。一匹は、うろうろ同じ所をいったり来たりと、精神病の兆候を示している。彼らには、もっと大きな空間が必要だ。大きなオリを作るくらいの資金援助は、今の日本なら簡単に出来そうなものだけど、だめだろうか？短期検討課題に加えておこう。ZOOチェッカーという仕事がある。彼らは、このタナの動物園をどう評価するのだろうか。

併設されている博物館を見た。ここでの山岸先生が、ガラスを鼻息で曇らせるほどにして見たというスケトベ（ヘルメット・モズ）の剥製を見た。他にもいろいろな動物の剥製や史上最大の飛べない鳥、エピクロニオス？の骨格標本もあった。卵が確かに、大きい。極めて大きい。ここで一番驚いたのは、巨大なサル型の骨格標本だった。あれが、キツネザルのように森に住んでいたのだろうか。樹上を軽やかに跳び回ったとは考えにくい。肉を付ければ人より大きく、ヒグマほどにもなりそうなのが、木にしがみついた格好で展示されている。叶わぬ夢なのだが、その面構えや、毛の色、動きを見てみたい。

帰りに拾ったタクシーは、クラリス・カーだった。また勝手に命名しているが、かのカリオストロの城でクラリスが乗っていたやつだ。あの車、007にも出てきて、カーチェイスのシーンに使われていた。今回、初めてその車に乗ってみて、体得した。あのゴーカート感覚が、たまらない。普通の乗用車に慣れてしまうと、加速性能など隔靴搔痒の感があるが、あのもどかしさは、カーチェイスのいらいらにピッタリだ。黒船を追いかける樽回船、ジェット機と勝負するプロペラ機、火縄銃とスナイダー銃といったところと相似関係にありそうだ。帰りは6000Fmgだった。車の格で値段が違うのか。また、相乗りになったために安いのか、ただ最後には、大きなお札にはお釣りがなかったことと

私の所持金の組み合わせから、5500Fmgに負けてくれた。帰りは行きの半分だったと喜ぶべきか、行きは帰りの倍だったと嘆くべきか、朝三暮四の故事を思い出す。

最終日、12時45分発の飛行機でレユニオンに行き、そこからレユニオン21時発の便でパリに戻る。機中一泊で、翌朝6時にパリに着き、そのまま出勤という予定で、相変わらず父上に叱られそうな無茶な計画で動いている。レユニオンーパリ間はビジネスクラスにした、と言ってもエコノミーと2000フランしか変わらない。タナの空港には余裕を見て、早めの11時に着いたが、全くその必要はなかった。12時、チェックインが始まらない、12時半、チェックインが始まらない。1時、飛行機は17時発とディレイになる。航空会社から昼食のチケットが支給され、2階のレストランで食事をする。17時、さらに遅れる、という。21時の乗り継ぎは大丈夫だろうか。19時、まだ目途がたたないという。夕食のチケットが配られ始めた。これで、恐らく21時の乗り継ぎはだめだ。信じられない展開ながらも、バカンス時の予期せぬトラブルはよく起きる。タナからパリに直行する別便への変更を試みるが、満席という情報に加え、エア・フランスの職員もおらず、手も足も出ない。21時になると、にわか、あと30分で出発する、というアナウンスが入る。なんといういい加減な。結局、レユニオンで一日滞在し、24時間遅れの帰りとなった。いかにも、バカンスにありがちなトラブルだった。

実は、レユニオンがどういうところか全く知識がなかった。あるいは、半独立国のようなところを想像していたが、全くフランス国の中、だったのだ。したがって、通貨はフランス・フラン。言葉もフランス語。人間は、フランス国籍。電話も国番無しで通じる。海のすぐそばのホテルに泊まらされたが、翌朝見ると、かなり波が荒い。フォー・ドファンもそうだったが、直接、大洋（インド洋）に面するところは、恐ろしいほど波が元気で、イファティーなどはこれからすると広大なプールのようなようだった。

今回の旅は、疲れた。トラブルがもっとも先鋭的に現れた旅ともいえる。しかし、無事に帰ってこれてよかった。各氏にお礼を申し上げたい。まず、今回何と行ってもビデオ氏には、特にお世話になった。レミューのキス、村を覆うバッタの大群、シファカン・ダンス、そして忌まわしきカヌーの浸水といった決定的なシーンをよく記録してくれた。続いて、大きなキャリー・バッグ氏にもお世話になった。パズルの楽しみはなくなったが、彼の懐の大きさに感謝している。イファティーでは、ビーチサンダル氏、海水パンツ氏そしてスノーケル氏にお世話になった。夜は、ウインド・ブレイカー氏のお陰で快適に過ごせた。緑の半袖氏と着流しのズボン氏にも随分お世話になった。なお、カメラ氏には大変気の毒なことをした。途中で体調を崩し、帰宅後入院をされたと聞く。或いは日本でなければ完治できない重症かも知れないが、一日も早い回復をお祈りする。ヒゲソリ氏には最終日には活躍いただいたものの毎日退屈な思いをさせたかもしれない。今回、毎日のヒゲソリをさぼったことは、筆者の気まぐれであり、平にご容赦いただきたい。ポカリスエット氏、エビアン氏、チョコバー氏、サングラス氏、サングラスのヒモ氏にも折りにふれ、お世話になった。文庫本氏、有斐閣の憲法の本氏、赤、青の各ガイドブック氏、そして山岸本氏は、貴重な示唆を与えてくれた。鍵氏、時計氏、コンタクト洋品氏、パジャマ氏、財布氏には、毎日面倒をかけたが、文句も言わずよく協力してくれた。虫避けティッシュ氏と蚊取り線香氏のお陰で実に心強い旅を送ることが出来た。また、ベレンティーでのセーフティーマッチ・ゼブラ氏との再会も忘れられない。ビタミン家のB、C、E兄弟と整腸剤氏には、最後にとてもお世話になった。また、ハンカチ嬢には、くるぶし保護に大い活躍していただき感謝している。ナイフ氏は、旅人の木の水量調査に欠くことが出来なかった。予備のペン氏と下着氏、特に最後の最後に参加が認められた黒靴下氏には、一日延びた帰宅のため最終日に大いに活躍してもらった。

最後に、ボールペンとノートの両氏に最大の感謝の気持ちを捧げたい。ややもすれば手持ちぶさたになりがちな一人旅を、よく支え励ましてくれた。彼らの働き無くしては、この記録もあり得なかったであろう。彼らは、とりあえずの役目を終えたが、今後とも仲良くお付き合いいただきたいと思っている。

最後の最後に、お忙しい中を貴重な時間を割いてお付き合いいただいた読者に心の底から感謝申し上げ、この記録の終わりとしたい。

初秋のパリでマダガスカルの落日を思い出しながら